

武蔵野と地球のつながりを考える

永石 文明

授業のねらい

立教大学新座キャンパスにおいて「武蔵野の自然」の授業を担当した。「自然」とはいても教養的枠組みをもつ全学カリキュラムに焦点をあてるため、理系・文系の枠組みを超えて広い意味での環境教育を主眼に置いた。「武蔵野」といった場合、一般的に武蔵野の地形的かつ自然史的理解を求めるところであるが、私のねらいとするところの、すべての人間はどこに暮らしていても、自然だけでなく、さまざまな人や地域・国からのつながりで存在していることと、同時に武蔵野のかつての豊かな自然の基盤となる里山の美しさが実は地球環境に優しい機能美をもつことを伝えたかったからである。これを示すと、

1. 一地域に暮らしていても、地球のさまざまな生態系機能の恩恵を受けて生きていること。
2. 武蔵野の自然といえども自然を形成する生態系機能は大きな自然循環でできていること。
3. 武蔵野と一口でいっても、そこは水系のつながりをもつ流域で形成され、生き物も人々の暮らしも水系でつながっていること。

である。

授業の進め方

武蔵野の土地を基礎に置きながら、植物油や紙はどこからといったような身近な素材から自然の捉え方を紹介し、武蔵野の自然を改めて考えてもらえるように進めた。私たちが暮らすうえで自然

は関係ないように思えてしまいがちである。しかし生活の中で普通に使っているものがいかに自然と関係し、影響を与えているかを知ることは重要なことだと考えるからである。

たとえば、食用油やマーガリン、お菓子、洗剤、化粧品などに使われている植物油。現在、日本では植物油のほとんどは東南アジアのアブラヤシから採取したパーム油を使っているが、そのことは意外と知られていない。ましてやパーム油がすべてではないにしても東南アジアの自然林を伐採しヤシ畑にされていること、地元の人々が採集狩猟生活から離れることを余儀なくされ、ヤシ畑に雇用されるが労働環境も収入も恵まれているとはいえず、農薬注入などの仕事で健康被害が起きていること、経済的貧困のため学校へ行けない子どもたちがヤシ畑で労働者となっていること、これらは一部メディアで紹介されてもほとんどマスコミには広がっていないことである。

この状態は、先進国による開発途上国の生態系機能の一方的な搾取により生態系機能が悪化し、開発途上国の貧困を産んでいる問題となっている。国連の地球サミットにより公正な分配が求められているが、いまだに生態系機能の偏った配分であり、実現はできていない。

私は今、サステナビリティ・コミュニケーション・ネットワーク (NSC) という企業 NGO の異業種間研究団体の生態系研究チームで活動の機会を得ているが、紙や油、鉱物といった素材の調達のほか、マングローブを伐採したエビ養殖

や木炭生産など、先進国における発展途上国の生態系機能搾取による貧困化現象はもっとも関心をもって取り組んでいる課題なのである。

さて武蔵野に振り返ると、かつては、油はひまわりや菜種や大豆から採取したものだ。畑にひまわりや菜の花が、水田の畦に大豆が栽培され、肥料としてのレンゲが栽培されていたら、循環という自然のもつ機能を最大限に生かされたものになる。最近武蔵野にある小金井市でも菜の花が栽培され燃料にしようという自治体も出てきたのは、武蔵野の自然を取り戻すうえでは喜ばしいことだ。

授業の展開

授業は、里山生態系の機能と価値、共生をテーマとしている。武蔵野において人々がかかわり創り上げてきた身近な環境である里山の、人との関係性を理解し、自然文化遺産の保全と活用を考察する。授業で紹介する素材は、武蔵野を構成する荒川・多摩川水系およびその崖線や丘陵、雑木林の自然環境である。あわせて武蔵野の自然環境の保全や環境教育、ナショナル・トラスト、農地を、国際NGOの活動成果や欧州の制度と比較しながら進めた。

授業テーマの計画は以下のように考えた。

1. 多摩川扇状地に残された狭山丘陵の自然
2. 子供たちに夢を与えるトトロ基金
3. トトロの森、狭山丘陵におけるNPOの活動
4. 多摩川左岸に開発された用水と自然
5. 荒川右岸の崖線下の豊かな自然環境
6. 新河岸川舟運にみる江戸の持続可能な開発
7. 先人が創り上げてきた武蔵野の新田と雑木林
8. NPOのつながりをもたらした新河

岸川流域

9. 武蔵野の環境保全に向けたNPOの役割

10. 武蔵野におけるNPOによる環境教育活動

授業では、まず、武蔵野について理解を進めた。国木田独歩の代表的随筆にある武蔵野。東京都と埼玉県にまたがる武蔵野台地の上に広がる平地。昭和の半ばまでは雑木林が特徴だったが開発によりほとんどが失われたところ。東京都と埼玉県にまたがる武蔵野台地の略称。地域としては埼玉県では西南部に属し、川越市、富士見市、朝霞市、所沢市、新座市などが入り、東京都では、西多摩地域に属し、西東京市、武蔵野市、三鷹市、小平市、小金井市、国分寺市などが入る。地理的そして行政区分的な説明だけだとなんともない。

この武蔵野台地では特に湧水や川に触れた。私は富士見市で市民を対象とする湧水市民大学の講師をさせていただいているが、これは市民といっしょになって富士見市内の湧水地域の自然と文化を探り保全策を考えていこうとするプログラムである。一方、東京都側でも昭島市の市民大学で崖線と用水の講座を2年間もたせていただいた。こうした経験を生かして武蔵野台地の端から湧き出る水とそこから水路を中心とした住民のつながりができていることを紹介した。湧き水や用水は、現在ではほとんど注目されない環境であるが、その地域においていかに豊かな環境を作り上げる要素であるかを感じてもらいたい。崖線というものは何であり、どういう機能をもつか。多摩川の北側の台地は洪積層の武蔵野台地と呼ばれ、関東ローム層に厚くおおわれ、ローム層の下には豊富な地下水が含まれ、これが段丘の崖下など露出して湧き水となって、各所に自然を生かした水路を見ることができる。武蔵野では、多摩川上流の羽村から取水され

た玉川上水が流れるほか（途中から下水処理水へ）、南部には昭和用水堰で取水された用水路、昭和用水が見られ、現在でも農業用水として利用され、市域の水田を潤していること。昭島市では今でも「水の講」とよばれる、水域に暮らす人たちが水路の共同利用や共同管理を通して伝統的な互助会組織としての地域コミュニティが残っていることも貴重な文化だといえる。こうしたコミュニティ機能をもつコモンズの意義について考えてもらうことも重要視した。

新河岸川水系について

武蔵野を語る場合、新河岸川水系の各河川とNPO活動は重要な要素である。新河岸川水系は新河岸川本川とそこに流れ込む支川からなり、主な支川として北から順に不老川、福岡江川、富士見江川、砂川堀、柳瀬川、野火止用水、黒目川、越戸川、白子川がある。本川としての新河岸川は河口近くで隅田川となり、東京湾に流れ込んでいる。

新河岸川に流れ込む5河川（不老川、砂川堀、柳瀬川、黒目川、白子川）を対象に国交省が参加者を募ってできた各河川懇談会がある。懇談会の活動内容は、対象の河川を知ること、現地視察と今後の川づくりなどである。この懇談会はやがてネットワーク化し、市民主体の新河岸川水系水環境連絡会へと発展していく。

水系水環境連絡会は、新河岸川水系の水質改善のため、市民参加による「新河岸川水系身近な川の一斉調査」を実施している。国土交通省が助成し、参加団体は任意団体をはじめ、自治体、生活クラブ生協、学校など50団体を超える。水の検査は実験施設が必要なため、流域の学校が協力する。調査後、報告マップを作成し、流域の団体や教育機関に配布する。川を自ら調査体験し、川の状態を知り、川を身近に感じさせるうえで、連絡

会の果たす役割は大きい。水辺は本来の子供の遊び場として環境教育の素材を提供してきた。河川の豊かな環境は高度経済成長期に河川工事等でなくしてきたものであるが、ようやく原体験の貴重な場として水辺が見直されてきている。

新河岸川舟運にみる江戸の持続可能な開発

新河岸川は川越から始まる。江戸時代初期から昭和初めまでの約300年間、川越と江戸を結ぶこの流れを数多くの舟が行き来した。新河岸川の舟運は、人や物資を載せて運んだだけではなく、川越と江戸を強く結びつける役目を果たした。川越に深く根付いた江戸の文化は、この舟運によってもたらされたといえる。

三富新田とその周辺地域は、江戸時代の武蔵野の新田開発により、屋敷地、農地、平地林を一体とした、三富独自の循環型農業や農村文化を形成するとともに、美しい景観を持つ武蔵野の面影を現在まで伝えてきた。首都近郊にありながらも三富地域に広大な農地と平地林が残されたのは、平地林の恵みを活用した農業を続けることや自然を守っていくことに誇りを持った地域の人たちの共通した思いと努力によるものである。

現在でも、三富地域では農地や平地林を有機的に連携させることにより、落ち葉堆肥を活用した地力の増強と保持、保水力の向上など、様々な固有の機能を生み出している。

ナショナル・トラストと農地

ナショナル・トラストの説明では、私がつとろのふるさと基金委員会における活動の経験が基になっている。東京都と埼玉県にまたがる狭山丘陵は、豊かな里山の自然が残っており、一般に「つとろの森」と呼ばれ親しまれている。この

里山風景を開発から守るため、市民の寄付金で買いとられた1つめの土地が、トトロの森1号地である。この基金は、1990年、アニメーション映画「となりのトトロ」の監督、宮崎駿さん初め多くの方々の賛同を得て、「トトロのふるさと基金」と名付けられ、トトロのふるさと基金委員会の任意団体からスタートし、1998年には財団となった団体である。その上でナショナル・トラストの意義について考察する。

ナショナル・トラスト発祥の地は英国。19世紀末に3人の市民からスタートした。1902年にはピーターラビットの生みの親、ベアトリクス・ポッターが、湖水地方の美しい風景を守るために土地を買い取り、ザ・ナショナル・トラストにその維持管理を委ねた。英国政府はナショナル・トラストに優遇の措置を設け、共同で問題を解決する政策をしき、ナショナル・トラストの存在がむやみな開発の抑止力にもなっている。個人はナショナル・トラストに寄付したり会員になったりすることにより参加でき、美しい自然環境の恩恵を受けることができる。ナショナル・トラストの存在は、個人の意識の向上に影響を与えている。企業もナショナル・トラストの考え方に一目置いた上で経済活動を行う必要性が出てくる。英国のナショナル・トラストで保全対象となる資産は、個人の屋敷から城などの歴史的建造物、自然の景勝地、海岸線、庭園、農地、産業遺産、遺跡など種類を問わない。保全された資産はプロパティと呼ばれ、英国のナショナル・トラストは英国全土にプロパティを所有する。特筆すべきは英国にそうした活動を支える制度、ナショナル・トラスト法という特別法があり、ナショナル・トラストに永続的な特権を与えている。

日本ではトラスト対象に制限がある。たとえば農地についてのトラストは国内農地法の制約があり難しく、トラスト

地としても生産農地にはならないのである。最近増えている里山景観風公園はその典型である。また日本では、同じ先進国にありながら欧州のように農地の環境保全に対して補助金がつくといった農業制度は存在しない。欧州と日本の環境農業政策を比較することは、日本の農業の将来のあり方を考えることになる。

身近な環境とのかかわりをレポートに

「武蔵野の自然」では、多摩川水系や荒川水系などの川、そして狭山丘陵や三富新田の雑木林で見られる歴史的な緑地、湧水などの自然、そしてそれらの自然と共生しながら続いている伝統や文化、さらに、現代におけるナショナル・トラストや緑保全活動するNPOの事例などを海外の事例も紹介してきた。そこでの視点や考え方は、武蔵野だけにとらわれず、国内や海外などの汎用性をもつ知識となると思う。

試験レポートは、「あなたの身近な自然（川や緑地）あるいは自然と関わる文化（祭や水の講など）を材料として、自然や文化についての概況を紹介し、人とかかわり状況を考察し、将来に向けてどうすればいいかについて考察してください」とした。その自然や文化をどうすれば持続可能にできるか、保全の可能性や方向性を語らせた。総じて、学生みんなが誠実に書いてくれた。なにより地元の川や文化に関心を向け、その持続可能性について考えてくれただけでも意義は大きい。リアクション・ペーパーは毎回の授業で書いてもらった。一学生の最後のペーパーにあった「何のために大学で勉強しているかが見えてきた」という言葉が私にとっての新たな授業展開の動機になった。

ながいし ふみあき
(本学兼任講師)